

親鸞の生涯

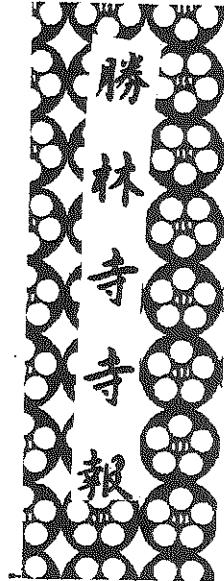
37

「貴方が勝手につくつて言い触らしているご教義のその呼び名（名目）を私は一度も聞いたことさえありません。それなのに、そのようなことを、慈信房善鸞に夜、親鸞がひそかに教えたことだと、あなたが言いふらしたために、これによって常陸・下野のお同行は、親鸞が、自分たちに嘘を言っていたんだと皆思つてしまつて、いるそうです。

こんなことではもう父子親子の縁を思つて、その母の尼に、考えもできない空言を言いつけられたと言つてゐるが、これも言語道断、呆れ果てたことです。み

ぶの女房が、こちらへ来て申すには、善鸞さんがくださった手紙ですといつて持参した手紙には、「継母に言ひまどわされ」ことはつきりと書かれているのは、なんとも呆れたことです。とにかくこん

な多くの空言を言い立てて、しかもそれを六波羅や鎌倉の幕府にまで吹聴しているのはなんとも理解し難いことです。これらの嘘いつわりは、まあ、この世極楽の肝要のご教義を、嘘をいつて、お同行たちを惑わし、しかも親である親鸞に嘘の報告までなさるというのは、誠に悲しいことです。如来さまのご本願をさえ「萎んだ花」に譬えるなど、それを聞いた念佛のお同行が、そろつて如来さまのご本願をお捨てになつたと聞くに及んでは、これはもはや如来さまの教えをそしる大罪で、親を殺し仲間の平和をみだす五逆罪であつて、到底容認することは出来ません。



今はもう、親でもなく、子供と思うことも思い切りました。

浮世の権力、俗世の縁である地方豪族や幕府の権力を利用して、お念佛の法を潰そうとするこんなやりかたを、親鸞は到底許すことは出来ません。」

五月二十九日、とあるのは康元元年（一千二百五十六年）聖人五十四歳

同じ日に関東の念佛集団の指導者にもこの義絶状の写しが送られています。

ということは、善鸞の非行・非儀が関東の弟子たちから親鸞へ訴え続けられたと言つて下さい。

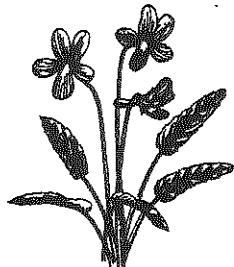
親鸞が最も信頼して、関東の念佛集団の間におこつてゐる異議や争いを鎮圧するためには、善鸞が、事情・経緯はどうであれ、かえつて親に背き、仏法に反逆したのです。わが子を愛し信じきついていた親鸞の打撃はいかばかりか。

人間の愛（慈悲）そのものを親鸞は根底から問い合わせ見ねばなりませんでした。

歎異抄第二条・第四条・第六条など、その年以後に書かれた晩年の筆の跡、また、「自然法爾章」という法語を拝読して当時の親鸞の胸中を伺つてみましょう。

有為の奥山

△口口口えて



とも思い切りました。
浮世の権力、俗世の縁である地方豪族や幕府の権力を利用して、お念佛の法を潰そうとするこんなやりかたを、親鸞は到底許すことは出来ません。そういう人生の終りが私にも日々せまつ

とも思い切りました。
浮世の権力、俗世の縁である地方豪族や幕府の権力を利用して、お念佛の法を潰そうとするこんなやりかたを、親鸞は到底許すことは出来ません。そういう人生の終りが私にも日々せまつ

有為の奥山

無明・煩惱から逃れられない私。

衆縁生起。目にも見えない無数の働き・影響力に縁(よ)つていただいているこのいのちとお釈迦さまは教えてくだささついるにも底許すことは出来ません。」

十一月 師走のこよみ

一日 奥小谷報恩講
二日 太田・東里報恩講
三日 あすなろ（録音）

唐川報恩講

市場報恩講

五日 小学校餅つき

合図回心仪用△△（→六日）

六日 小田報恩講（托鉢）

仏婦連盟評議員会（専福寺）

七日 小田報恩講

八日 あすなろ反省会

九日 野尻・矢根報恩講

十日 平野 初枝さま一周忌法事

十一日 湯口 久義さま忌明法事

十二日 丸中・片間報恩講

十三日 暮坂報恩講

十四日 口小谷報恩講

十五日 百合・桐野・寺坂・日野辺報恩講

十六日 鉢山・豊岡報恩講

十七日 弘道小同窓会

十八日 口小谷惣報恩講

十九日 丸中・片間報恩講

二十日 兼井志かのさま忌明法事

二十一日 あすなろ（編集）

二十二日 検診 出石組忘年会

二十三日 中嶋 勉さま忌明法事

二十四日 みのりを聞く会

二十五日 除夜会

二十六日 お鏡餅つき（四時）

二十七日 すす払い

二十八日 お鏡餅つき（四時）

二十九日 お鏡餅つき（四時）

三十日 お鏡餅つき（四時）

三十一日 お鏡餅つき（四時）

三十二日 お鏡餅つき（四時）

三十三日 お鏡餅つき（四時）

三十四日 お鏡餅つき（四時）

三十五日 お鏡餅つき（四時）

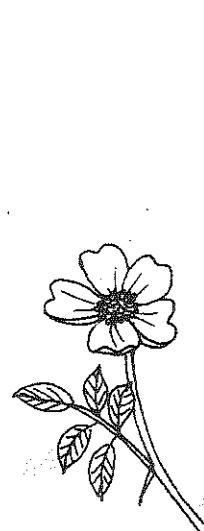
三十六日 お鏡餅つき（四時）

三十七日 お鏡餅つき（四時）

三十八日 お鏡餅つき（四時）

三十九日 お鏡餅つき（四時）

四十日 お鏡餅つき（四時）



絵が生涯の友となつたのは

画家 福島 一二三



画家の多くは子供のころから絵を描くのが好きであったように、私も又、絵の好きな子供でした。しかし、私は画家を志し、美術学校で絵画を学んだ訳ではないのです。父親がない我が家には、そんな余裕はなく、母は、朝早くから夜遅くまで仕事に明け暮れる毎日でした。ある日のこと、夜中に目が醒めます。私が絵を生涯の友とする始まりでもあります。その向こうには働く母の姿がありました。子供ながら胸が痛く、つらく悲しい思いをしたことを覚えています。そしてそれは、私は絵を生涯の友とする始まりでもありました。その母は昨年、節分のみぞれ降る寒い明日方に、感謝のことばを残して逝きました。

人はよく「好きこそ物の上手なれ」と言いますが、そう簡単なものではありません。たゆまぬ努力と多くの人の支えがあつてのことです。どうにか、絵を描いて四十年あまり、それなりに画家として認めていただけるようになりました。

人の一生を語る時、何をもって幸か不幸か明確な答えなどあろう筈がありません。自分自身を省みて思いますが、さびしい時も、悲しい時も、つらいときも、貧しいときも、病める時も、それは天からの与えられた人それぞれの固有の財産なのです。生きるために使つてこそ幸せをもたらすものであると思ふのです。

過去があつて今の自分があります。決して、恵まれた境遇とは言えませんが、自分を形成するには十分ありました。そして、絵を描き続けられる一つの要因となつているのも確かなことです。

有り難いことに自然是、私たちに平等に生きる力を与えてくれます。しかし、全ては、真摯に、生を見つめるか否かに委ねられています。こうして見えてくる生命の讃歌を私は慈しみをもつて描きたい。それは路傍の草花であつたり、ちいさな生きもりたちや四季の風景であつたりします。幼い頃の遊び相手は今も、私を励まし、慰め、心を癒してくれます。称歎するに余りある大いなる自然の恵みを享受して、研鑽を重ねていきたいと願っています。

(ないおん『私の雑記帳』より)

母校 「弘道館小学校」

昔、出石藩の藩校の校名をそのまま伝えていたのですが、いつのころであつたか（日中戦争の始まつた頃だと思うが）、古臭い「館」などという字は消して、「弘道小学校」、または「弘道国民学校」と変えてしまつたのです。

幕藩時代には、水戸の弘道館をはじめとして天下に（佐賀・彦根と出石の）四弘道館ありと誇つたものでした。

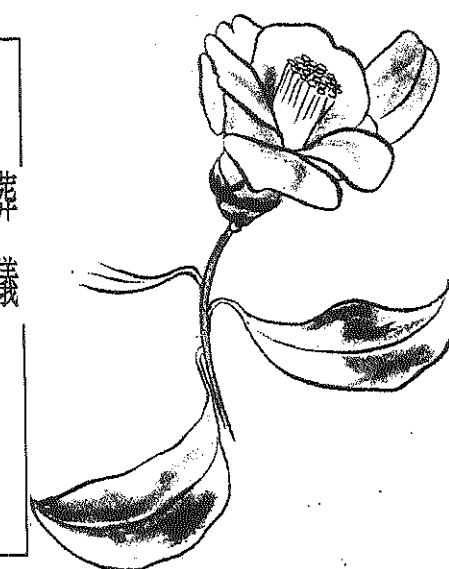
それが「弘道小学校」となり「弘道国民学校」となつたのです。教育理念の衰弱が感じられます。

そもそも、「弘道」という校名の由来は『論語』巻第八「衛の靈公第十五」にあります。

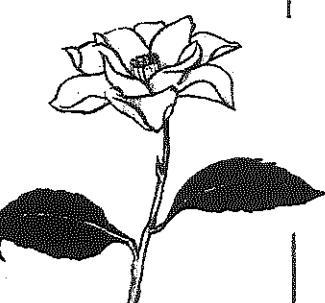
子曰、人能弘道、非道弘人也

(人能ク道ヲ弘ム。道、人ヲ弘ムルニ非ズ)

孔子先生がおっしゃつた、「一人一人の実践があつて、そこにはじめて進むべき道が拓けるのだよ。なにか抽象的な徳目があって、人の進むべき道を拓いてくれるのではあります」。



十一月十日	葬儀 勉	坪口 さま
十一月十九日	栗尾 さま	九十一歳
十一月二十三日	久義 さま	八十五歳

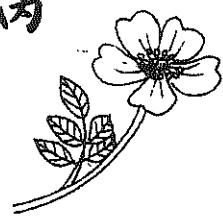


ついでにもう一つ。その昔、弘道館小学校の運動会には次の歌をみんなで力いっぱい歌いました。はちきれそうな子供の元気が漲つていました。

- 一、朝露わたりて 吹く風は
立てる旗を ひらめかし
昇る朝日の 色映えて
- 二、鍛えし日ごろの 手並みをば
ころも空に 躍るなり
- 三、一声 耳を つなぎきて
勝利を告ぐる つつ音
ほまれを呼ばう 鶴の声

(覚えて歌える人は八十歳半ばを過ぎました)

除夜会



平成二十一年

十二月三十一日

午後十時三十分

除夜のおつとめ

『正信偈』(行譜)

十一時三十分ごろより

『除夜の鐘つき』

おもち・甘酒など

接待用意しています

ご家族おそろいで

お参りください